

Leaders TOPICS

「炭素のボヤキ」循環を壊したのはわたしですか？

神奈川県地球温暖化防止活動推進員、水・大気部会 長村吉洋



■ 環境問題における質的遷移

環境問題と言えば公害と言われた時代は、ほぼ過去のものとなり、地球規模の気候変動問題に世界全体が取り組む時代となっています。地球温暖化防止を掲げて始まった温室効果ガス削減の動きは、1994年の気候変動に関する国際連合枠組条約および1997年の京都議定書の削減目標の取り組み時からすれば、30年間で世界が大きく変わっていき様子を実感できるようになりました。

世界の国々だけでなく、企業体をはじめ、自治体や地域、学校、市民レベルでも気候変動対策と適応策を自分事としてとらえ、それぞれに特色ある様々な取り組みが進められています。2050年を1つの大きな目標年としたことも取り組みを前に進める大きな力となっていることは確かです。この問題に対する大きな推進力となっているのは、地球環境の変化が人間によって引き起こされている問題であり、それが人類の生存を脅かすものになっているという認識からくるものに他なりません。したがって、私たち人間が世代を超えて、その責任を自ら背負い、最善の道を選択していく義務があるということになります。

■ 炭素をめぐる問題

これまでは健康被害や環境破壊が起こってから対策が取られて解決してきた歴史でしたが、未来を予測し、危機的状況を回避するだけでなく、よりよい未来を作っていくためにみんなで知恵を絞って努力していこうという段階になりました。SDGs が提唱され、2020年頃から数年間で教育現場でもあたりまえの概念として使われるようになっていきます。

温室効果ガスとしての二酸化炭素やメタン、一酸化二窒素、フロンなどの気体の性質と量が、持続可能性を壊すものでないようにすることが気候変動対策の基本となりますが、低炭素社会から脱炭素社会へと目標が引き上げられ、炭素に関わる問題やエネルギーシフトの話題が大部分を占めているのが現状です。

人類の生存に関わる様々な問題は、人間が原因で引き起こされており、生物や物質には何の罪もないのですが、

石炭や二酸化炭素は悪者、二酸化炭素は有害物質、二酸化炭素は出してはいけない、オゾン層破壊は二酸化炭素によるものだ、などのように誤解や誤認識も散見されます。さらに、炭素のない世界はありえないのに、脱炭素という言い方が適切かどうかという疑問も湧いてきます。

■ すべてが循環する世界に

炭素は生命体の元となる有機化合物を構成する根本の元素で、炭素なしには生命体は存在できません。化学的には、脱炭素というと、炭素を取り除くという意味になり、用語として正しい使い方ではないと指摘されています(文献)。しかし、いったん作り出された用語が、広く使われるようになると、言葉の解釈と実際の意味がずれていってしまうのは、仕方がないことなのかもしれません。

人間の活動が急激に地球規模で爆発的に増加している事は、単に時代の流れだとして片づけられない問題です。私たちがより健康で、楽しく、さまざまな活動ができるようになってきたことと、私たちがどのような責任を負っているのかということは、切っても切り離せないことであり、持続性、永続性の観点に立って、人類全員で最善の努力をすべき時となっています。

産業活動と私たち一人ひとりの生活行動自体が一体となっているのは当然のことですが、人の健康と生活の質に加えて、生命系全体を含む地球環境全体の健全性と永続性を常に意識した行動が求められていると思います。



【文献】「科学(化学)的に正しい「炭素循環」を我が国が目指す社会の用語として使おう!」「化学と工業」第75巻9月号667頁、日本化学会、2022年9月 <https://www.chemistry.or.jp/journal/ci22p667-tanso.pdf>